

知られざる世界（独善的巨編）

「実録・実感——白蓮洞」

田 中 勝

白蓮洞のことを、どう書いたらいいのか、実のところ戸惑うばかりである。白蓮洞や千里洞はかなりセンセーショナルな事ではあったが、世間から見た目は、洞窟の中での実感とは、ほど遠い事と思えてしょうがない。そして探検部というものは「記録」を求めたがり、また世間でも、そう思っているようである。全く馬鹿げた虚妄である。これは一重に、洞内説明図、写真、行動表——いわゆる報告書というものが、絵に画いた餅のようなもので「実感」を伴わないからであろう。

思うに、「実感」なしの洞窟探検なら、部室で、洞窟の絵でもかいていけばよい。

「洞窟の中は、どんな感じですか」と聞かれることがある。私は、写真や説明図を見せて、熱心に説明する。質問と説明が繰り返される。ところが一時間たっても駄目、相手の質問から推察すると、理解度はゼロ。私は話し疲れてイヤになる。どうせ、わかりゃしない。それで報告書を書くことも飽きた。これが本心なのだ。

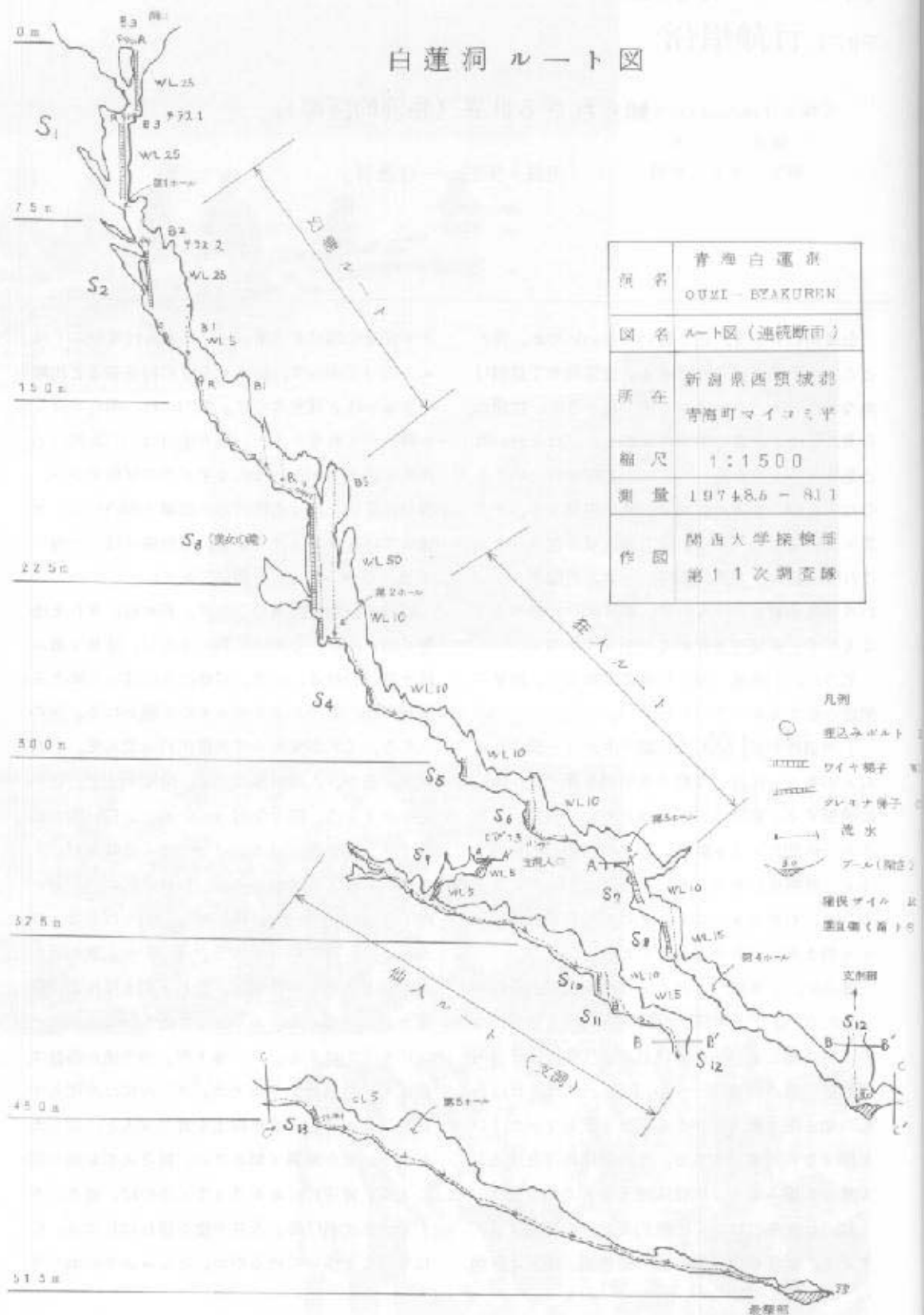
確かに、「実感」というものは個人の占有物かも知れない。『長時間、洞窟の中に居た後洞口で見る空の嬉しさ』——O.B. 杉江氏。『子宮回帰願望、原点復帰』——O.B. 八木氏（氏は、私の知る限り最もしつこく洞窟を愛していた）ひと様々な「実感」がある。私は確実に存在する「実感」の重みこそ、洞窟探検そのものだと思う。

私の「実感」は、『心理的な遊びの面白さ』である。洞窟の中の恐怖感、絶望感、現実と妄想

とが完全に受けあう事——それらは唯一の「ほんもの」であって、誤りだらけの報告書など比較できないほど真実なのだ。洞内では、頭の半分しか働いてくれなかった。残り半分は、「妄想」と仲良く遊んでいた。そんな半ボケの状態だから、洞口に這い上がった時には不思議と洞内のことを憶えていないかったりする。報告書には——暗くて見えなかった——と書いておく。

幻覚、幻聴は毎度のことだ。初めは、それを極度に恐れるが、しだいに慣いならし、仲良く遊ぶ術を身につける。幻覚、幻聴は人によって異なる。多種多様、ありとあらゆるものが現われる。実のところ、それが楽しみで洞窟に行ったんだ。「石灰岩の壁が、人間の顔になる。暗闇の中を、白い姿がさまよう。梯子を登っていると、白い腕が延びてきて足を引っばる。」——そんな時には、「こんにちは、また会ったな」白い姿には、「おい寒くないかい」、白い腕には、「引っばるなって、忙しいから後にしてくれ」。?……。歌が聞こえてくる。美しい合唱だ。思わず聞きはれる。足音が近づいてくる。ふりむくと誰もいない。タバコにも毛がはえる。犬の鳴き声。帰り道が落盤で埋まる——道をまちがえた。プールには水死人が浮かびあがる。10年以上も昔の友人と、ぼったり会う。足が凍傷で動かない。坊さんのお経が聞こえる。背中に、おぼさってくるのは、誰だ。ザイルが水に溶ける。天井や壁が揺れはじめる。私は今どこを歩いているのか。どしゃぶりの雨の中、

白蓮洞 ルート図



洞名	青海白蓮洞 OUMI-SYAKUREN
図名	ルート区(連続断面)
所在	新潟県西頸城郡 青海町マイコミ平
縮尺	1:1500
測量	1974.8.6 - 8.11
作図	関西大学探検部 第11次調査隊

街の雑道を歩いている。今、下っているのか、登っているのか。

すべて幻想である。それも、ひとりの時だけである。洞窟の面白さは、まだ見ぬ場所へと歩いていくことだろう。一度通ったところも、上り下りとは、随分違った印象をうける。チムニーの装飾で降りたところも、いざ登るとなると高く見える。低い滝など飛びおると、登るときになって、ホールドもスタンスもない、つるつるの3mの渾たったりする。洞窟の中では、場所ごとに景観が違ふ。白蓮洞だってそうである。断面図や、数少ない写真ではわからない。

話は変わって、白蓮洞がどんな洞窟か説明することだしよう。

＜調査の経過＞

71年の秋、偵察（第1テラスまで降りる）。清水氏（O.B.）命名——白蓮洞（ひゃくれんどり・白い蓮の花に似ているからだそうだ。町役場の人たちも名付けた——水洗便所（いい名前だ）。私の印象としては、全く良くない。洞口から垂直に井戸みたいになっていて、これは難物だ、と思った。

72年の夏、洞口から本洞部の第4ホール（—38.0m地点）まで、測量、写真撮影。すこし人数が少なすぎた。

74年の夏、洞口から、支洞、本洞を経て最深部まで調査。

そのほか、75年の秋にも第3ホールまで行った。私個人としては、4回の合宿で15日くらい入ったことになる。74年の調査で判った事だが、平面図を見ると、白蓮洞は、千里洞の下を通過、マイコミ平の低地のほうへ走っている。千里洞で使用された梯子プレート（アルミ管）も発見した。どこで絡がっているのかは、よく判らなかつた。

以下の洞内説明は、主として74年の合宿のことである。

＜洞口から第1ホール＞

0m～—5.0m。白蓮洞は、千里洞から北東へ約250m、クバーレづたいに登ったところにある。洞口の標高は70.4m。洞口は2つあるが、沢から直接水を吸いこんでいる方が大きい。もう一つは草茂るドリーネ状で落盤、流木などで通行が危険なため、梯子をかけなかったが、第1テラスで合流する。沢から直接落ちこんでいる洞口は、5mと8mの径の隅円形をなしており、そのまま第1テラス、第1ホールまで石灰岩の壁が垂直である。洞口ちかくは、壁が風化し細かくヒビ割れ、まるでレンガを積んだ様だ。その上に腐食土、コケ、小さな草木が付着している。第1テラスまでは25m梯子をかけたが、洞口とテラスの間部は、少し広がっていて、梯子は壁から離れた。

第1テラスは、3.4人たてばいっぱいの広さ（畳2枚程度）で、その上外傾して危険である。沢の水が直接、もしくは岩づたいに降ってくるので、長時間確保した者は、みじめであった。テラスから下の方の第1ホールは、暗くて見えない。テラスから上を見ると、丸い空が見え、鳥の鳴き声も聞こえる。太陽の光はこれまでで、これから下は、とても暗いのです。第1テラスから狭い溝状の水の通い道にそって、ハシゴを25m降りると、そこが第1ホールで、幅は約20m、天井の高さ15m～20m。流木、土砂、落石のほとんどが、ここで止る。流木の中には、電柱の2～3倍の太さのものもある。第1ホールは、瓦礫の山といったところである。洞窟の底の方から、どこまで上がってくると、本当にうれしい。最後の力をふりしぼって、一気にのぼる。そして、早く外へ出たい、夏の暑さも恐ろしいアブもがまん

する、そんな思いを何度もした。

しかし、S1を降りるときは危険である。洞窟の環境になれないせいか、失敗が多い。足をすべらして15m落ちる人もいたし、片足を梯子に引っかけて、面を下に、ゆらゆら揺れるのを見た。とくに、テラスの下25mが多い。暗さに目がなれないためだと思う。テラスで確保する人が、本当は危険なのだ。

＜第1ホールから美女の滝＞

－50m～－182m。第1ホールはなだらかな傾斜で奥につづき、次に高さ8mの落差がある。チムニーの要領であり、そこがテラスとなり、そこから25mのS2となっている。梯子をかけたが、フィクス点のすぐ隣りに、流木、落石が不思議なバランスで浮石となっており、一触即発の危険な状態である。S2を降りたところから、水流がみられ、多量の水が天井からもある。幅は2～3m、天井高20mぐらいの隘路が始まる。これが、謂ゆる「幻聴ルート」である。水音のヤカましい所である。S2の下から美女の滝上部までは、階段状になっている。5～6m水平に進んで2～8m垂直に降りることを、十数回繰り返さなければならない。その2～3mの滝は、ほとんど流木が主体となって小石を多く抱きこんだものである。滝の下には必ず、水深0.3mぐらいの、1m四方のプールがある。ここを下ってゆくと、いくら行っても同じ所を歩いているような錯覚に

おちいる。梯子、ザイルはほとんどいらないが、腕の疲れるところである。

最後に美女の滝上部であるが、非常に狭くなって幅は1m前後である。滝の下から人や荷物を吊りあげる時には、確保者は、3～4人が一列縦隊でザイルを引っ張ることになった。ここは、滝から冷たい風が吹きあげ、寒いところだ。しかし、美女の滝を降りた者にとっては、ここは天国のようなところで、ここまで来たらすぐ外に出られるという感じがする。

＜美女の滝から第3ホール＞

－182m～－340m。美女の滝の命名は、O.B. 八木氏。ビジョビジョに濡れるから。私としては、例の「白い美女の幽霊」に足を引かれた記憶の方が強い。美女の滝は、この白蓮洞の中で最も落差の大きいもので、50m垂直と、3m四方のテラス、10mの垂直とて、出来ている。滝、テラス、第2ホールが、ひとつの円筒形となり、直径は10mぐらいである。初口から美女の滝上部までは、ほとんど濡れずに来れるが、この滝(S8)を降りきったところで、乾いたところは全くなくなる。水温は、5℃であった。下るときは、首すじから背中にかけて冷水を浴びるゾクッとして急いで下りたい気になる。上りは、手がかじかんで、梯子のプレートが握れない程だ。何度行き来しても、不安なところだ。美女の滝上部から降り始めてすぐ、右側の壁に、赤茶けた



模様が見える。私は、その血が流れたような色と形を見るたびに、ゾットしたものだ。

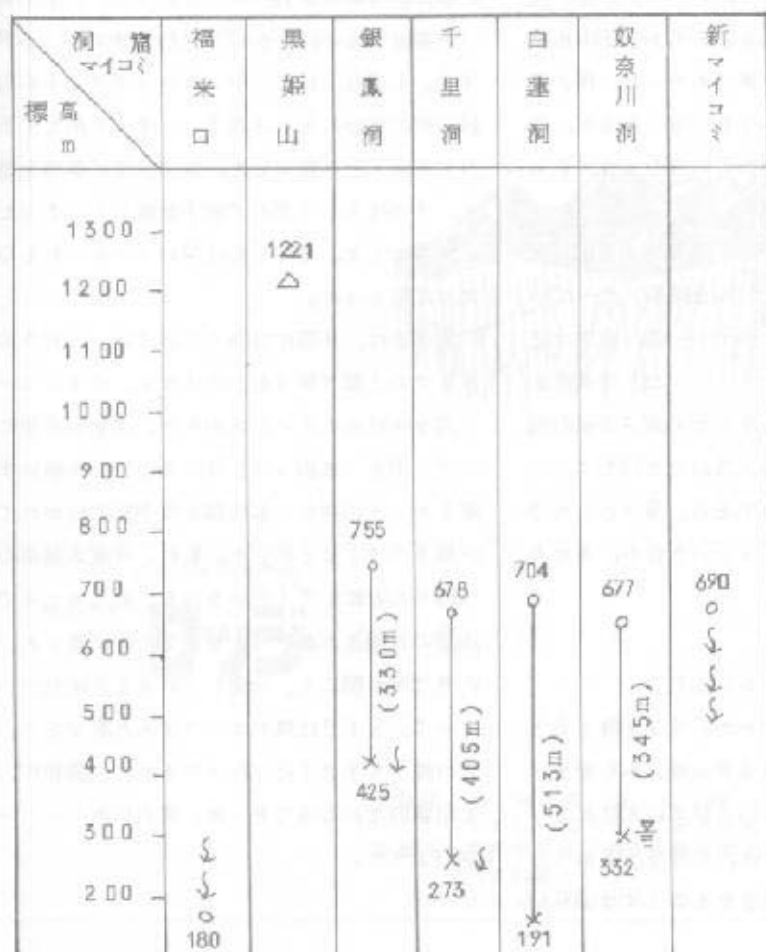
第2ホールは、5m四方。滝の水が頭上からふりそそぐところだ。ここで一晩テントを張った事があるが、まん中でねていた私はほとんど熟睡できなかったが、両端で寝た者はテント内にしみ込んだ水のため寒くてねむれなかったという。ここでことわっておくが、洞窟内に入ると、何でも湿ってしまい（湿度が高いため）、着ているもの、シュラフすべて濡れてしまう。私のシュラフも同様。

第2ホールから第3ホールまでは、細く狭く、くねくねと曲っている。途中に3つ、10m程の

滝（S4、S5、S6）があり、狭いルートと呼ぶ。とにかく狭くて、荷物を運ぶのに苦労した。カニの横ばい、ヒザとヒジをつついての匍匐前進もした。S4は流木、S5、S6は岩のくぼみに梯子をフィクスした。滝の下にはプールがある。S6の下には、2mほどの「とびつきハング」と呼ばれる壁があるが、橋れずには登れないところであった。

第3ホールは、天井から落ちてきた岩、天井、壁から吐き出された多量の土砂、流木などがある。ここで支洞と本洞とに分かれているが、広いホールの中で、支洞の入口、本洞の入口は、ひと目で

洞口・洞底のレベルの比較



- --- 洞口
| --- 洞窟
× --- 洞底
↓ --- 流水
≡ --- 地下水位
() --- 洞窟の深度

発見できない。ここは、風もなく天井からの水滴もなく、わりに暖かく感じられ、テントを張るのに適している。

<本洞部——第3ホールから出合>

第3ホールから、第4ホールを通過して出合の滝の下(S12)に至る。これを本洞部と言うのは、支洞部よりも広だけで、水量は支洞部の方が、はるかに多い。このルートは、全く(湿とんど)濡れずに行ける。本洞部の入口近くには、タムシロの化石がみられた。洞窟全体でいえば、上から下へ、アズリナ、タムシロ、貝類の順で化石が発見された。S7、S8は、水もなく薬に降りられる。S8の下には、ヒザまでのプールがあり、河原のように、小石が多くある。そこから20m進むと、第4ホールである。第4ホールは、床と壁とが一枚壁で出来ていて、小石が少しあるが、全体が真っ白く、壮麗な建築物の内部のようであった。

第4ホールから出合までは、幅5~10m、天井高10mで、掘りになだらかな傾斜になっている。途中には昔のザイル、梯子の一部、流木なども発見された。出合の滝(S12)は、支洞部から落差20mで落ちてくる水のため深さ3mの滝壺になっている。壺は3m×5mのだ円形で、一枚岩に掘られた見事なものである。青々とした水をいっぱいたたえて、ドドッという音が、あたりを響きわたり壮観である。

<支洞部——第3ホールから出合>

この支洞部は、第3ホールからS9を降りるとある。支洞部自体は、-330m地点から始まっている。全体が、ヒザぐらいの深さの水路になっている。天井高は5~10m、巾は3~5mぐらい。水は、白蓮洞を流れてきたもの(すなわら幻

馳ルートや狂人ルートを流れてきたもの)とは、とうてい思えない。急にこれほど水が増すはずが無い。おそらく別の洞窟を流れていたものが、この支洞部に流れ込んでいるものだろう。

支洞部は、-330m地点にはじまり、S9の下を通りすぎ、ゆるやかな傾斜で、しばらくは水深0.5~1mぐらいの水路になっているが、S10の手前には、3~4ヶ所、深いプールがあり腰以上つかって、3~4℃の水の中を泳ぐように進んだ。S10、S11も頭から水をかぶって梯子を降りた。

S11(5m)では、驚くべき事が起った。私が滝の上で、下から登ってくる隊員を待っていた時の事だ。なかなか登ってこないで、「早く来い。」と催促すると、下から「今行きます。」と声がかかる。しばらくして、やっとヘッドライトが私の目の前に現われたかと思うと、すっと消えて下の方でどボンと水音がした。後で、彼に事情を聞くと、手が冷たくて思わず梯子を離してしまった、ということだ。滝の下には深いプールがあるので、ケガは無かった。

S12は、実際には降りていない。と言うのも、S12の上部で梯子をかけるため、ジャンピングで穴をあけることにしたからだ。岩盤が非常に硬くて、刃を二本折ってしまった。持ちが無いです。第3ホールに戻り、本洞部と支洞部に分かれて再び降りてゆくことにした。私は、今度本洞部の方へ行くことにして(というのも、仙人ルートで、泳ぐのに飽きたから)。S12の下に着くと、上の方で声が聞こえ、合流していることに気づいた。よって、S12は降りなくてすんだ訳である。出合の滝(S12)は、壮大であり、白蓮洞中、最も印象的なところであった。青白い水——ソーダ水のような。

<出合から最深部まで>

出合は、全体が滝壺になっているので、我々は、そのふちをへつって、次の5mの滝を降りた。その後は、小石、土砂が急にふえ、小落差を、ゆるやかな斜面が連続するようになる。水は、もはや川のように流れ、広大な河原が左右になる。天井は、20～80m、幅も50mに及ぶところにある。進行方向の右手には、4～5mの高さまで砂の堆積がある。いわば、河岸段丘といったところである。

最深部の手前は、天井が低くなっていて、特に、20m手前は、天井と床とがほとんどくっつきそうになっている。天井と床との距離は50cmほどで、そのうえ水が半分以上流れ、水面から天井までは、20cmぐらいになっている。先がどうなっ

ているか全くわからないので、何度も行こうか行くまいかとためらい、やっと決心して水の中を腹這いになり、ヘルメットを天井にこすりつけて水を飲まないよう気をつけながら、5m進むと、天井がやっと高くなっていった。そこは、砂地の岸が少しあり、その先はプールになり、奥の力はいきどまりになっている。プールの幅は5m、奥行き15m、深さは岸の近くで2.5m以上あった。水は土砂まじりで白濁し、泡がいくつも浮かんでいる。水はもう流れていない。おそらく砂の湖底にしみ込み、どこかへ流れてゆくことになるのだろう。

白蓮洞の最深部はプールであった。

白蓮洞は、深さ51.3m、全長約1.2kmであった。
(16代)



山とスキー専門店

株式会社

ロッジ

梅田店 店長

佐藤 洋治

大阪店 大阪市北区神山町3-4

TEL 06(312)8195

京都店 京都市下京区四條通新町東入る月鉦町39-1

(興和第一ビル1F)

TEL 075(255)0595